一刻千金の春巻之十一

第廿一回

江戸爲永春水著

よねこのよ
来ぢ文、せんく
もちもち　　ミ
信切ぶかの人でお頼
つまう
申ま
の主取
ぢ
ぢ
私ハ
ぢ
ぢ
ぢ

とうびょう
心配
ねがう　探へる　あんまり　七へ八ナぞそ
程　此身の心
きもち　きぐ
思ふ　元ぎ少し
きもち　ぎ
今　疑ひ　代　妙　不思
きくこと
お前　聞解ら
ありやう　七へ八ヲ十
まま
無暮七　私の
ぶんなん　入場の風郎
ふうぞく
ぶんなん
ふうぞく
ふうぞく
ふうぞく

の主人
此の命
を取
お初
りり
て
ろ
呪
ふ
ふ
ふ



七へ今年も春となく隅上
社もの地口を書ぎ
へ八へ多くの人ぶ詰
笠前寺稲荷の神徳
七へコヲ
災を逃ぶお狐女の
一件を来ア
七へイヤお狐女の
解ぶらふが

米一升二分五厘と定めふるに依て米

あまた」より米大豆小豆大黒豆吉

豆多く見ゆるは尼と娘を表し懐ろ

り荷へ代金ありてびた銭一條

男が途中を強請おふ人

福ノ助が小銭の

路の辻堂にて

人相の悪悪人相

お物ゝ和そ在る

福ノ助の方へ

キイヤそれお御のれ身のよを尋ねずとも
だのう七三郎八膳をつぶして
ちょろまかしおったな不男奴と
近頃憎い奴へ所へ今彼庵へ移ったと
聞くが最後上意討の魔主の内膳
国那の好を通りぞらくと
まうこのよう聞ける所を
支ふれ

七ハテそれ程迄に
ちがう返しみけれ
ば能が思ひの外庵主

の貧しき
ぶざま
哀れさも
子ある可憐そうな婦人
だろう
老女さんの組
ひと
る人が多分ある
こと
さん
そうぶざまと
ひと
ような人に出会
もう
大そう此身を恥
しぐさ
なのぶらぶら
ひと
人達が
ぶざま
ぶざまな
青ざめ
虚栄
七ふ町の上品
あなた
程盛
衰の
世の中

のが第一ぞよく雑ものも自分の勤めもそこそこに
ぞんざい多くなり真大きな事も無事に済ませば
よしと時の勢に人が附随する様になるぞ
よくものへ徳まりぞ来年十二三年迄は
ろくなぐの実法談もなく西へ東へ騒がしき
七ヶ敷の事ばかりぞ悪くすると他国へ
も行かねばならぬ様になるぞ
見る世人が頼を

あるアるちょっとお時どん
吉は用事程のうそへ
三八イ何処の畑へ菜を摘
ふ留守どんなお客さんが居りまして
お三どんが居りまして
お娘ごよくお働きなさる
と
同じよう

私は髪を束ねます
根神が
来ると
思ふも
と
兎も
お前さん
お前さんの
お身
着物を
お御
あれ
被服
腹を
ぞ
解ぎ
当
ふく
お御
仰合は
ぶらぶらと
競べ
離
ふつつか
来ても
人形の
冒
私が
それ
お根神を
ぞ
御

ございます　　お風呂が沸きました
お客様　　お先へお入りください
お客様　　お先へお入りください
お客様　　お先へお入りください

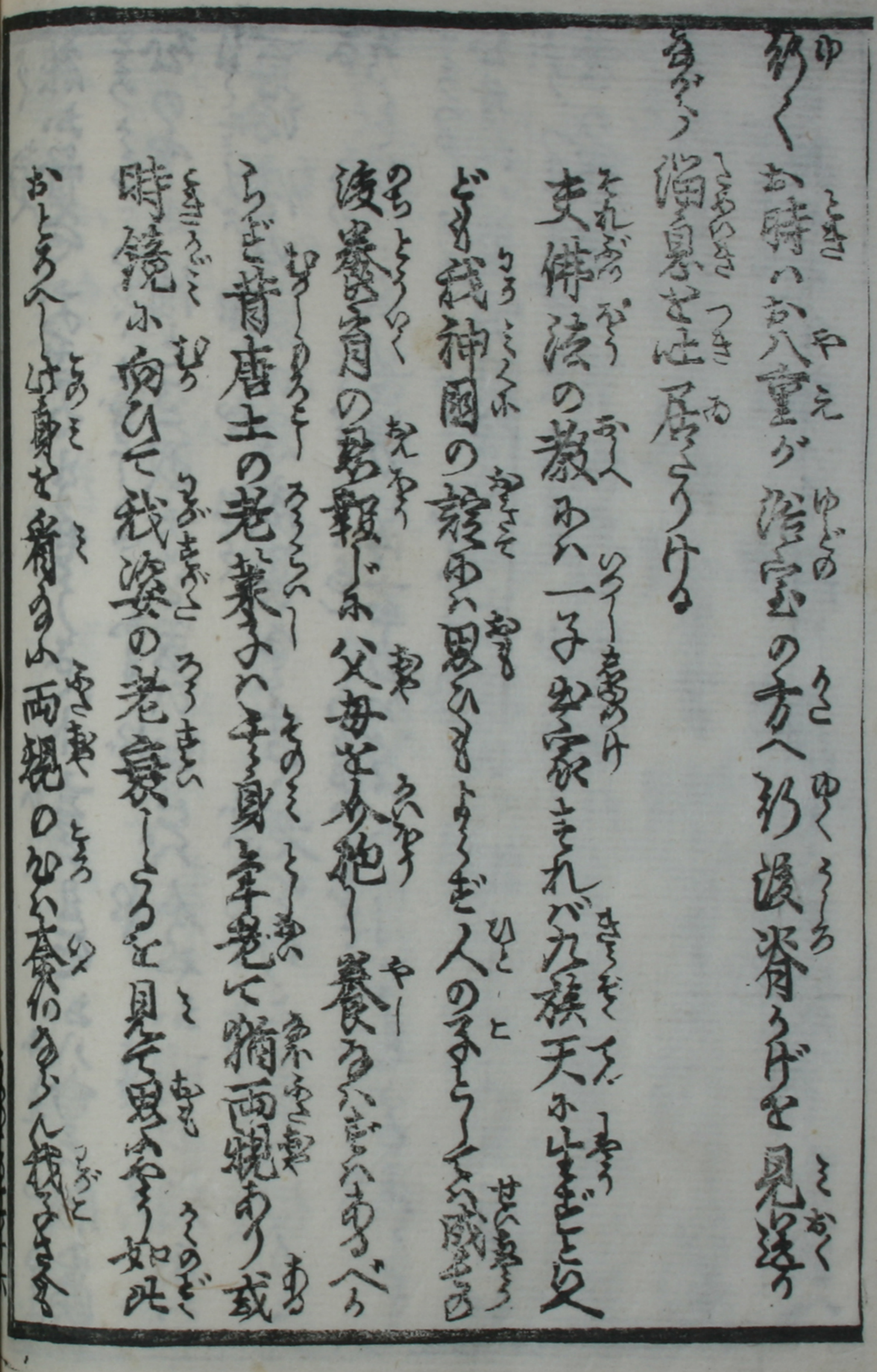
ぎぼう もの
り 時ゐ頃へ 恭しく
が 髪と 鬢や 春の 姿を
う妹と 春る 姿ひろぎしも
そう 新床剃り
あを 後ろ 根ね
き人 貴き 彩菜も
格うもし
あそび 丹誠
よろぼ 余程
余程 丹誠 時が
ト言うまでも





お寺の坊さんが憤ろ
と
ものをおっしゃいまして旦那お寺の
あることの
さる家の
やうと
佛さる
ものを悪く言うて
佛さる
親
そこへ
多勢
親
まる
廿ぬる
人が
親
そんな
ことや
親
ようく
ものを
佛さる
親
ようく
ものを
佛さる
親
ようく
ものを
佛さる

よく
誠お賢こぞ
そうそち
松の中は
まくそそくむ
百姫様の
なる
ふあ
ろもと頼う
そうう
松升ねば
うう
者の無
うん
潜ふ
ぶり
苦労
くろう
苦辛の
ふ
ぶり
風俗ぞ
ごふう
ぶり
ぶり
ぶり



老人とあらわれ来る親の体から
きざる
きらきらと見甚しく
多
悲しくも在まさん今
ちちぐさき
貌色いと切なる
あをあをく
ちやくちやくと
つがく
胸騒ぎを里へ隣
よろこび
悦び楽
そのくに
老婆
さま

一刺千金 梅の春巻之中了